文學の妙
禪學の極

字と云ひ教外別傳とも稱するに外ならぬ。然るに文學に於ても此の理は全然同一で、文學も亦其の根本の精神は自然の美を歌ひ、天眞至情の流露を發表せんが爲めに文字を假りるのであるから、其の妙は文字其のものに存するのでなくて、文字以外に含蓄あり意義あつて始めて自然の美も活現され、天眞の至情も脫露されるので、文學の妙は實に其處に存するのである故に禪と文學とは、其の根本に於いて離るべからざる關係を有つもので禪の玄旨は文學を假つて玄愈玄なるものあり、文學の妙趣も禪理を含んで妙更に妙なるものとなる。されば禪宗では偈と稱して韻文を用ひた詩の體を以て宗乘を擧揚せるもの頗る多く、達磨西來して先づ「吾本來此土。傳レ法救二迷情一。一華開二五葉一。結果自然成一」の偈あり、三祖の信心銘、

讃文に現れたる禪

永嘉の證道歌、石頭の參同契、洞山の寶鏡三昧、雪竇の碧巖集、宏智の從容錄等皆韻文を以て禪の玄旨を傳へたもので、單に之れを文學として見るも實に不朽の妙文學である。また黃山谷や蘇東坡など其の他禪味を帶びた詩文の一種高き氣韻ありと稱せらるゝも、實に禪と文學が根本に於いて其の性質を同うする關係から來るのである。禪餘外集に

諸佛の慧命は文字に非ず。然れども之れを文字に托して以て傳ふ。故に善く讀む者は文字を化して慧命と爲す。善く讀まざる者は慧命を化して文字と爲す。慧命を化して文字と爲すと曰ふと雖も文字の存するは即ち慧命の存するなり。春は花に在つて花未だ殘はれざれば則ち春未だ殘れずと爲すが如きのみ。

禪は春にして文字は花

とあるが、禪は春で文字は花である。春に花無くんは春おのづから春ならず、而も花獨り存して花即ち春と云ふべからず、春來つて花發き、花發いて始めて春、詩禪一味の妙境以て知るべきである。

試に鬧市堆塵の裡、間思雜慮紛然として起り、心亂れ氣散じて如何ともすべからざる時、起つて郊外淸閑の地に到り、樹陰に榻を占め、茶烟香し く氣澄む所、冥目沈思良久して靜に卷秩を取つて之れを繙かば會て疑義するもの疑義自ら融解し、時に句を探らんか句立ろに湧き、時に文を想はんか文忽ち成るであらう。是れ靜思冥想心氣を澄淸するの賜ではないか而して禪は毎も云ふ如く靜慮を要旨とするものであるを知らば、想を練り情を洗ふ文學的創作に與ふる禪の修養の効果如何に大なるものあるかは思

ひ半ばに過ぐるであらう。されば朱子は

毎日半日靜坐、半日讀書、之れを行ふこと數年、長進せざるを患へず。

と云ひ唐彪之に附していふ

然るに世人終日書を讀んで輟めず、竟に片時の靜坐なきものあり、これたゞ讀書の益あるを知つて而して靜坐の却つて大なるを知らざるなり。

と。わが佐藤一齋亦いふ

余弱冠前後、鏡意して書を讀み、目千古を空うせんと欲しぬ、中年を過ぐるに及んで一回悔悟して痛く外馳を戒め、務めて內省に從ひき、然る後自ら稍得る所ありて此の學に負かざるを覺えぬ。

と。西人ラボックいふ

吾人は書齋に靜坐して萬國を經歷す。吾人は船長クックと共に或はダーウキン、キングスレー若くはランキンと共に地球を周遊し得べく、而してこれらの人々が吾人に示す所のものは、吾人が親しく實驗するよりも詳細に涉るなるべし。

と。靜坐異想の學問に於ける偉大なる効力あるを知るべきである。

吾が國の文學は、古き竹取物語を始め、奈良朝の萬葉集、平安朝の物語紫式部の源氏物語を始めとして其の他日記歌集等を見るに、其の思想は著しく佛教の感化を受けて、因果無常等の佛教的着色を帶びて居ることは最も明白であるが、それらは此に云ふ禪とは殆ど直接の關係なきものと謂つて可い。何とならば日本の禪は平安朝の終り鎌倉時代に入つて始めて傳

來したものであるからである。禪宗傳來後、吾國の文學に如何なる關係を有するに至つたかと云ふに、足利氏の中葉より天下大に亂れ世間は兵馬戰陣に忙しく、文學の如きは殆ど地を拂ふの狀態となり學問は獨り出世間の僧徒が之れを修むるのみで、所謂五山文學となり、戰國時代となつてより武士は愈〻文事を顧みるに遑なく、日本文學の命脈は一に禪僧の保持する所となつてしまつた。此の狀態にありて五山文學のみは甚だ盛觀を呈し絕海、義堂等多くの漢詩文に堪能なる碩學を輩出した。禪僧の我が國近世に於ける漢文を維持し發展せしめた功は決して埋沒すべからざるものが存するのである。

ひとり漢詩文のみならず和歌も亦當時の僧侶によりて其の精髓を講究さ

耕雲和歌の第一義を論ず

れたのである。南禪寺の耕雲が和歌の第一義なりとて

萬物の性は不生不滅なり。生滅にあづからざる性萬理を具足せり。この一性は天地に先立ちてあらずといふ時もなく、所もなし。天地に遲れても亦然なり。これ萬物の根元なり。和歌のことわり亦則ち此にあり……

吟咏して花をあはれみ露をかなしむは已にことばに落ちたれば和歌の第二義門なり。歌の眞體にはあらざるべし。

と言つて居るが、是れ禪の玄旨を和歌に應用したもので、春來つて花、花開いて春の消息を語るものに外ならぬ。

和歌が禪の流行につれて一種の影響を受け、連歌の流行となり、連歌は更に荒木田守武、山崎宗鑑等の手によつて平民化され俳諧の連歌となつて

盛に行はれた。連歌といふのは一首の歌を二人で作る戯れで、よほど古くから行はれたものらしく、萬葉集にも見え、拾遺集にもあるが、連ね歌といふ名稱の現はれたのは金葉集からで

桃園の桃の花こそ咲きにけれ　　賴經法師
梅津の梅は散りやしぬらむ　　公資朝臣

の如く、一人が上の句を咏んで、他の一人が之れに和して下の句をつけるといふ趣向である。それが宗鑑、守武の頃に至つて徒に煩鎖なる形式に拘泥するを嫌ひ、一種の滑稽的內容を有し、用語に束縛なき作風を生じ俳諧の連歌となつたのである。例へば

發句

馬に乘りたる人丸を見よ（下の句）　宗鑑

ほの〳〵と明石の浦は月げにて（上の句）

花よりも鼻にありける匂ひ哉（上の句）

月はおぼろにふくる猪（下の句）　守武

斯くの如くして三句も四句もつけて長くするも隨意としたが、何ら高き理想も眞面目な主張もない滑稽詣諧に過ぎなかつた。此の初の句を發句と云ひ、後の句を付け句と云ふのであるが、後には付け句が廢つて發句のみが盛に行はれるやうになつた。之れが德川時代に入つて松永貞德の貞門風、西山宗因の談林風など唱へられ、所謂俳句の法式は漸く一定して五七五の三句十七文字となつたが、內容は尙ほ依然として貧弱で、貞門は俗語を多

貞門流と談林風

く用ふるを特色とし、談林は奇拔な句を尙び形式の拘はれを嫌つて滑脫縱横の風があつた。

霞さへまだらに立つや虎の年　貞德

海棠かいや左樣にはなしの花　立圃

早厥やみ山の奧に懷手　貞室

と云ふ風なのが貞門流で、

おしづかに御ざれ夕陽未だ殘んの雪　宗因

嶽々や呑手の若者花修行　松意

いかのぼり神はあがらせ給ひけり　帷中

大三十日定めなき世の定め哉　西鶴

俳句

正風と伊丹風

之れが談林風である。之れらはたゞ機智を弄し、人を驚かすやうな句を得んと力めたに過ぎぬ。次いで松尾芭焦出でゝ正風を唱へ、始めて俳句が大なる人生の趣味を解するものとなつた。同時に平泉兎貫あり、亦極めて眞面目なる作風を創め伊丹風と稱した。此の新しき二派は專ら陳腐を厭ひ清新を尙び深き趣味を有して短い一句の中に微妙の意義を含ませるやうになつた。

花の雲鐘は上野か淺草か　芭焦

いざさらば雪見にころぶ所まで　同

荒海や佐渡に横ふ天の川　同

遠く來る鐘の歩や春かすみ　兎貫

古池眞傳

時鳥馬追船頭御乳の人　同

行水の捨て處なし蟲の聲　同

殊に芭蕉の門下には所謂蕉門の十哲とて其角、嵐雪、野坡等多くの名手を出し、其の俳風は天下の俳壇を靡ける勢となつた。芭蕉は博學謹格の人物であつたが、亦禪に參じて造詣頗る深く、其の俳風は寂靜、優美、崇高、雄大等の諸調を備ふと稱せられ、最も詩趣禪味に富んで居る。彼の句で最も有名で誰も知つて居る「古池や蛙とびこむ水の音」の由來について世に古池眞傳といふ一書が傳はつて居る。其れに載せたる處を見るに常州鹿島根本寺の佛頂長老、博覽大悟の知識なり。桃青翁（芭蕉の別號）舊交の師なり。近來深川長慶寺へ移轉せられたるに、桃青を訪はんとて

芭蕉省悟

六祖五兵衞（長老の僮僕）を供して芭蕉菴に至る。六祖先づ菴に入りて「如何なるか是れ閑庭草木中の佛法」桃青答へて曰く「葉々大底者大、小底者小」夫より長老内にいり、「近日何の有る所ぞ」桃青答へて曰く、「雨過ぎて青苔を洗ふ」又問ふ「如何なるか是れ青苔未生已前の佛法」とある時、池邊の蛙一躍して水底に入る音に應じて「蛙飛び込む水の音」と答ふ。佛頂長老「珍重珍重」と唱へて持ち玉ふ所の如意を桃青に授與す。長老席上に紙毫をとりて「本分無相。我是什麼物。若不會、爲汝等諸人。下一句子。看看。一心法界。法界一心」と書して諸風子に示し玉へば、其時法界と一心の水音に耳ひらけて、實に桃青翁の省悟を各隨喜しけるとなり。この時杉風謹んで桃青を賀して「我師風雅に參禪の功を積んで今や水音大悟の一句に、佛頂長老證明傳法の如意を授けたまへば、今は天下に宗匠たるべし」とて賀儀をのぶ。嵐雪が云ふ「水音に俳骨悉く連續すといへども未だ冠の五字をきかず、師之を定めたまへ」翁のいふ「我もこの點を思へり、しばらく諸子の高論を聞いて而後に定んと欲す、二三子試に此の冠五をいへきかん」各首をかたぶけて錬思す。やゝあつて杉風「宵闇や」の五文字を出す。嵐風は「淋しさに」と伺ふ。其角ひとり「山吹や」と色即是空々即是色の曲をつくして其姿を調へんとす。翁つくゞゝと見ていふ、吾子等が冠五各一理を含んで平生の句にまされり。就中其角が「山吹や」は、花やかさちからありて好し。さりながらかゝる七五の冠たてんは、觀相見樣の理を離れてたゞ此

庭のこのまゝに我は「古池や」とおき侍らんとあるに、各あつと感じ入る。

と出て居て、即ち此の句は芭蕉が禪の悟りを開いた時のものであるとしてある。之れが史的事實であるか否やは疑はしいが、兎に角、芭蕉が佛頂和尚に參じて禪の妙旨を味つたことだけは實事であらう。

また小說戲曲の作家にしても、近松門左衞門や、曲亭馬琴の如きは、矢張り禪的素要があつて、名什傑作の源泉を作したと云はれる點もあるので禪が吾が文學に多大なる影響を與へ來れることは少しも疑ふ餘地が無いまた文學と密接の關係を有する繪畫にも大なる影響を與へたことは、其の性質上當然のことである。元來詩歌の感興は直に自然から得來るもので

禪と繪畫

浦上春琴　安積艮齋

名山大水に接して其の想を錬り情を遣るといふは詩人の大切な修養である それの如く畫も亦天地自然の美を畫くものであるから、此の點に於いて全く同一の樣子がある。是れ詩は有聲の畫、畫は無聲の詩と云はるゝ所以で

浦上春琴は之れに就いて

畫を學ぶは猶ほ禪を學ぶが如し。多年修行の功を積みて研鑽實究し、竟に我を忘れて自然に入る所に其の妙を見る。

と云ひ、安積艮齋も

凡そ書畫を見るに、たゞ其の着色のみを見て其の筆を着けざる所に趣あるを見ることを知らざる者は、眞に書畫を見るものにあらず。

といつて居る。書畫の技術に於ける、如何に禪と其の趣を一にするかは容

易に知らるゝのである。或る人が去る所に繪の名人だといふ者あるを聞いて一つ困らせてやらうと思ひ、「どうか風の繪を畫いて呉れ」と申し込むと其の繪師は早速筆を執つて、一本の柳を畫き、其の葉が横に靡いて風に吹かれて居る如くに見せたといふ。また或る繪師は「踏花馬蹄香」と云ふ繪を、馬の足もとに蝶が飛んで居る所を畫いて現はしたといふ。有形を假つて無形を現はす、當意即妙の趣きは、禪が言詮不及意路不到の妙旨を文字言句の上、拂拳棒喝の裡に示すのと、如何にも同じ樣子でないか。されば彼の有名な雪舟、兆殿司等を始め隱元木菴等、古來禪僧に畫及び書の名手は非常に多く出て居るので、禪が書畫の上に其の微妙の心要を活動せしめ、之れが發達に影響を與へたことは亦甚だ大なるものなりと謂ふべく

當意即妙の轉機

尙ほ美術工藝の上に於いても、矢張り其れが詩文書畫と其の性質を同うする點に於いて、禪との關係密なるは言ふまでもないのである。

又やゝ方面を異にするが、彼の茶の湯の如きも亦禪とは親密不離の關係を有するもので、茶が始めて日本に傳はつたのは傳敎大師が入唐して歸り始めて日本に齎らしたといふが、猶ほ廣く用ひらるゝに至らなかつた。下つて平安朝の末期、榮西禪師が入宋して茶の木を持ち歸り、明惠上人が之れを植ゑてより漸く盛に世に行はれるやうになつたと云はれて居るので日本に於いては茶其の物の傳來より既に禪とは離るべからざる關係があるのである。殊に禪の公案にも「喫茶去」など云ふのがあつて、茶の作法は禪の心要と全く同じ樣子を有つものである。

一休と珠光

日本で茶の湯の始祖と云はれるのは南都の珠光であるが、珠光は實に彼の一休禪師の弟子である。或る時一休「茶の湯の要は如何」と問ふと、珠光は榮西禪師直傳の法を具さに答へた。一休更に「趙州の喫茶去如何」と問ふ、珠光之れに對しては唯默然として口を開かなかつた。時に一休侍者に命じて一碗の茶を與へしめ、珠光が將に手に取つて飲まんとする所を、一休持つ所の鐵如意を以て大喝一聲茶碗を粉碎した。珠光はと見れば泰然自若、動かざること山の如くであつた。而して暫くして一休を禮拜した。一休是に於いて其の徹悟を證明し、珠の去らんとする時更に「喫茶し去る時如何」と云へば「柳綠花紅の眞面目」と答へて珠光は怡悅して退いたといふ。是れ茶禪一味の消息、禪に志す者茶を習ふ者の共に最も參得すべき活公案である。

茶道の歌

珠光は茶道の奥意を紹鷗に傳へ、紹鷗に千利休、今井宗久、津田宗久の三人の高弟あり。茶道は三派に分れたが、就中利休は茶祖と仰がれる立派な人格を有し、千家は後世最も盛になつた。利休には茶道百首あり、また南坊宗慶に訓示せる道歌七十首といふがあるが、いま其の中の二三首を次に擧げて見やう、

手前にはつよみばかりを思ふなよ
　つよきはよわくしかるくおもかれ
いつにても道具扱ふたび毎に
　とる手はかるくおく手おもかれ

千宗旦茶道の指月

露地すきや客もあるじも茶と友に
　ふりやはらげて隔心もなし

といふ類である。また茶道指月集の序には

利休の孫千宗旦といふ人あり。生涯利門名路に奔せず、常に簾を垂れて清味を甘ふこと已に七十餘年。雪のあした月の夕、興いたるときは茶友を招き、興つくるときは獨坐す。たま〳〵此の道を問ふ人あらば答へて曰く、本來禪によるが故に示すべき道なし。但わづか平生語り傳ふる古人の茶話を以て指月とせばおのづから得ることあらむ。

と見えて居る。之れらに就いて考へても、茶道と禪とは其の交渉關係甚だ密接なるもので、其の起源來歷よりして心要とする所全く禪に基くものなることが明かである。

禪の精神的活力

以上の如く、禪は意志的訓練に本づく武士道と關係したると同じく、情感的立場よりする文學藝術にも離るべからざる因緣を有するもので、臨機應變、隨類隨緣、縱横無礙、殺活自在に活動する禪の心要が、之れらの諸方面に與へたる効果は最も顯著に、甚だ大なりと謂はねばならぬ。

三　禪と衛生

禪の肉體的活力

以上は主として禪が精神的方面に活用された事證であるが、身心の相關は今更いふまでもなく、人間が大に精神修養を必要とすると同時に身體的擁護といふことも亦最も大切なことである。身體的擁護、之れを換言すれば即ち衛生といふことである。吾人は既に精神的に禪の妙要を觀たのであ

るから、更に當然の順序として此に身體的方面即ち衞生上に禪が如何なる態度を取り、如何なる効果を與ふるかに就いて考へて見ねばならぬ。

盤珪禪師の逸話

昔、盤珪禪師は既に高齡老齒の境に達してからも、日々食物の量を量つて、身の養生を怠らなかつた。一日僧問ふ「禪師は生死透脫の善知識、猶ほ老後食を量り生を欲せらるゝか」と、禪師は之れに對し「吾が身は吾が身にして吾が身にあらず、吾が慧命は即ち諸佛の慧命である。一切衆生を利益すべき大切の身心、之れを粗末に出來ようか、君子一日世に在れば一日世に利あり、一言一行世を利せんとする者は須く身の健在を計らねばならぬ」と示されたといふが、人間が此の世に處するや、貴賤上下の差別なく、各皆其れ〴〵の盡すべき本務を有つて居る。人にして若し此の本務を盡さぬならば人たる價値はないので、從つて本務を遂行する唯一機關たる身心の健全を計るといふことは、世間的に考へても最も大なる道德でなければならぬ。況して身即ち佛陀である、佛陀を以て佛陀の働きを現はすといふ絕大無限なる禪の根本道德から云へば、吾が五尺の身體は實に最尊最貴のもので、一日の身命、一刻の行持にも細大留意して此の身を愛護するといふことは絕大なる意義を有し、最も忽にすべからざることである。「磯までは海女も簑着る時雨かな」磯へ出れば直に海水に沾れ鼠となる海女も道中は時雨すら之れを避けるといふが、人の情である。生死の大海に沒在せる吾々も、磯までの此の五十年は、雨を厭ひ風を避けて身を大事にせねばならぬのである。

最尊最貴の身

白隱禪師の獨按摩法

されば佛敎には佛說佛醫經、佛說佛喩經など、專ら此の衞生のことを說いた經典もあるが、禪宗歷代の祖師も亦此の點に重きを置いて懇切なる注意用心を示されて居る。其は前に坐禪の注意に於いて諸祖の意のある所を摘錄した數十個の條件のうちに見ても明かであるが、近くは白隱禪師の獨按摩法の如き最も具體的で直接に衞生の方法を示されたものである。

先づ掌を擦り、兩手の指を組み、組みたるまゝでもみ手をする、それより掌の中を拇指でもみ、手の中指の筋をもみ、指を引き伸し腕を逆に摩擦し、頰を逆にこすり、鼻の左右を擦り、顏を横にこすり、眉を逆にこすり、耳を左右の掌にてこすり、腦をもみ、頭を左右に振る、左右の手を屈伸すること三回、左右の二の腕を摑み上下し、肩を廻し、指を組みて鼻の通りまで上げ、それにて膝をうち、左右の拳を以て臍裏の背骨を打つ。

これが初傳で、かくして體內の血液を循環せしめ皮膚の力を增し、次に後傳に於いて

先づ胸を左右よりこすり、腹もたゞ左右よりこすり、手をあげて左右の耳をつかみ、捨てるが如くし、左右の耳朶をつまみ、手を左右に大きく開き、足を以て尻を打ち、手を組み合せて胸を打ち、左右の拳にて足の裏を打ち、手の中指を合せ十踏まずにて踏み、足の甲をふみ、足の指を引き伸し、足の指のまたをもみ、足の甲を裏へ縮め、さんりの筋を揉み股の內外をもみ、さんりを左右の拳にて打ち、左右の手を背と組み合せ

て腰骨を打ち、更に仰臥して足を充分に伸し、開くこと一尺、呼吸三度す。

心量次第に寛大

といふので、詳しいことは口傳もあるのであるが、之れだけでも立派な運動法である。此の外禪師が衞生に就いて禪理より説かれたものは多くあるのであるが

元氣自然に丹田の間に充實して、臍下瓠然たること未だ篠打せざる鞠の如し。若し人養ひ得て斯くの如くなる時は、終日坐して曾て飽かず、終日誦して曾て倦まず、終日書して曾て困せず、終日説いて曾つて屈せずたとひ日々に萬言を行ずと雖も終に怠惰の色なく、心量次第に寛大にして氣力常に勇壯なり。苦熱煩暑の夏の日も扇せず汗せず、嚴霜素雪の冬の日も襪せず爐せず、世壽百歳を閲すといへども齒牙轉た堅固なり。怠らざれば長壽を得、若し夫れ果してかくの如くならば何れの道か成らざる。何れの戒か保たざる。何れの定か修せざる。何れの德か充たざらむ

若し又如上の故實に達せず、眞修の祕訣を諳んぜず、妄に自分悟解了知を求めて觀理度に過ぎ、思念の節を失する時は、胸膈痞塞し、胸火高ぶり上りて兩脚氷雪の座に浸すが如く、雙耳溪聲の間を行くに齊うして肺金痛み碎け、水分枯渴して終に難治の重症を發して、命根も亦保ち難きに至る。これたゞ眞修の正路を知らざるが故なり、寔に悲むべし。

と云へるが如き、正に禪の正身端坐、氣海丹田に力を入れて靜慮觀法する狀態から、身體を調整することを示されたものである。

坐禪其者が衞生的

世、或は靜坐寂定內觀冥想の坐禪の形式を以てこれ太だ非衞生的であるといふ如き謬見を爲すものもあるが、坐禪その物が最も衞生的の方法であることを知らねばならぬ。坐禪の方法注意等に就いては既に述べた通りであるが、坐禪が身を正直にし、緩ならず急ならす、意廣體胖、平安愉悅の狀態に保つこと、氣息を調整して澁滯せしめず、滿滑ならずして極めて靜穩なる狀態を保つこと、意識を統一して散ぜしめず、昏沈せしめず、常醒々の狀態を保つこと、及び睡眠と飲食とを適度ならしむる等のことに就いて實際に考へて見れば、何人も如何に其の衞生的なるものであるかを知るであらう。就中飲食は身體を保ち生命をつなぐの綱で、衞生といふことに就いては最も直接なものであるから、之れには多大の注意を拂つて消

飲食の節量せよ

化營養に適好なるものを取らねばならぬ。禪經には

夫れ食の法たる、もと身に資し道に進めんと欲するなり。食若し過飽ならば、氣急しく身滿ち、百脈通せず、心閉塞して坐念安からざらしむ。若し食過少ならば身羸れ、心懸かに意慮固からず、此れ皆定を得るの道にあらず、復た次に若し穢濁の物を食すれば、人の心識をして昏迷ならしむ。若し身に宜しからざるものを食すれば宿疾を動じ、四大をして違反せしむ。これを修定の初めとなす。深く須く之を愼むべし。故に云く身安ければ道隆なり。經に曰く飲食節量を知れば常樂閑處にあり、心靜に精進を樂む。此れを諸佛の敎と名く。

とあつて、禪の大理想を體現する最も重要なる條件として飲食を愼み、身

睡眠を適度にせよ

の健全を保つべきことを説くのである。また睡眠の適度といふことも云ふまでもなく衞生上の必要條件で、養生訣には

凡そ人の睡眠中は血を頭上に運ぶこと多く、湊理の守衞空疎なるが故に横臥すること久しきに過ぎて覺めざる時は、漸く上實し下虛し、頭々擁塞して身體の諸液自ら稠く、濁りて心識も從つて愚蒙になりゆくものなり。眠は眼の食と古人も云へば必ず貪りて過度にすることなく、よく其の則を定め、寢る時にはよく精神の安定やうにして身心の倦勞を補ふべきなり……朝寢好きなる者は日昇るに從つて、頭部に血の迫ること多きを以て、必ず瞋怒鬱惱等の惱を生ず。

とある如く、眠は實に眼の食、人が飲食を貪り病を口から入れる如く、此の睡眠を貪つて遂に身心の倦勞を來し、衞生を害するに至り易いのは人情の弱點である。固より睡眠不足は亦衞生に害あるものであるが、とゝすれば人は此の弱點から過度になり勝ちであるから隨分注意して良習慣をつけ之れが過不足なきやうにせねばならぬ。

佛醫經の得病十因緣

佛說佛醫經の中に得病の十因緣が說かれてある。(一)には久坐して飯はず。之れは今日の語で云へば運動不足である。(二)には食に貪なし。即ち暴飲暴食である。(三)には憂愁。即ち精神過勞である。(四)には疲極。即ち身體過勞である。(五)には淫佚。即ち房事過度。(六)には瞋恚。是れは感情を過激ならしめて身體に影響を及ぼすことをいふ。(七)には大便を忍ぶ。(八)には小便を忍ぶ。(九)には上風を制す。(十)には下風を制す。と

僧祇律の横死九因

いふのである。又僧祇律には横死の九因といふが擧げてあつて、(一)には饒益にあらざる食と知つて貪り食ふ。(二)には食を量らず。(三)には內に未だ消化せずして更に食ふ。(四)には强ひて咽下す。(五)には已に消化して出でんとするを强ひて制す。(六)食、病に適せず。(七)には病に隨つて籌量せず。(八)には服藥を怠る。(九)には智慧なくして心を調ふる能はず。是れらは確かに衞生を害ふ有力な條件であることは說明するまでもないことで、禪家の諸德も此の類に關する注意は隨分親切にされて居るのであるが、併し最も根本的に禪が重きを置くのは精神狀態より先づ身體的に及ぼす影響といふことで、此の方面の修養は諸禪師の最も力を入れて說かれて居る所である。近くは原坦山老師の惑病同源論の如きは其の適切なるもの

原坦山の惑病同源論

惑體と諸病の關係

で、世に行はれて居るから、志ある者は一本を求めて熟讀するがよい。今其の一節を抄錄して見ると

惑病の原因といふものは、黏纏渾濁の流動液であつて、頭惱を蔽蓋するものを名けて無明と云ふ。而して胸腹に集結するものを煩惱と名くる。蓋し惑體は諸病の源であつて、諸病は惑體の結果である。其の原因一であるから痴根と名け病源と名くるのぢや。

と病源を示し、更に

今其の身心の集結を除き滯礙なからしむるの法は、禪定の力によるの外はない、禪定の力は堅確剛强でなければ効能はない、其等の結根を除くを解脫と云ふのぢや、若し頓に最も剛堅なる禪定の力を得て、無明の根

本を拔去し、痕跡を絕するに至つたならば、即ち最勝の覺者と號し、又究竟樂地と名け、極樂世界とも名くるのぢや。

と云つて病根を根本的に治療することは禪定の力によらねばならぬことを說いて居る。實際人の身心相關は不思議なもので、天氣の工合や、四圍の境遇事件や、若くは直接身體に負傷等の異變のあつた時など、すべて外面的條件によつて精神に著しく影響を及ぼすことあるは何人も常に見る處であるが、此の反對に精神狀態如何によつて直に身體外面に影響を來すといふことも疑ふべからざる處で、催眠術の實驗に於いて、是れは火であると云ふ暗示を與ふれば、棒切の冷いのを握つても熱い〳〵と云つて實際に手に燒痕を現はすが如き、正に精神作用が肉體に及ぼす著しき例であるが

身心影響の事實

催眠狀態にあらざる覺醒の狀態に在つても此の種の事實は認められるのである。先年獨逸のコッポ博士が虎列刺菌を發見して、虎列刺は黴菌によつて傳染するものであると主張したに對し、民府大學教授ペッテンコーフエルト氏及び助手エンメリッヒト氏が之れに反對なる論をなし、論より證據と此の二人は虎列刺菌を呑み込んでしまつた。而も二人の意志は黴菌によりて決して傳染せぬものであるといふ固き信念に住して寸毫疑ふ所がなかつた爲めに、身體に何等別條を見なかつたといふことである。また丁度此の反對の例は虎列刺の病毒の更にない清潔の室に、一人の死刑囚を入れて此の室には恐るべき虎列刺病患者が臥て居て、只今死んだばかりであると云ひ聞かした所が、今まで身體に何の異狀も無かつた其の者が、見る〳〵

コレラ非傳染論

健全なる身體と精神

虎列刺病の狀態を呈し來り、やがて死亡して仕舞つたといふ事實もある同じく健全な人間である、而して同じく虎列刺病の試驗である。而も菌を呑んでさへも平氣で居るのと、話を聞いたばかりで病狀を呈して死亡するのとの甚しき相異の結果を見るといふのは、人の精神作用が肉體の狀態に及ぼす影響の如何に大なるかを證して明かなりと謂ふべきではないか。俗に病は氣から起るといふのも、簡單なる卑語の裡に大なる眞理を含むものと謂ふべく、禪が專ら練心に努める所以も亦自ら明かである。

健全なる精神は健全なる身體に宿ると云ふが、人間身心關係の不可思議なる作用より云へば、亦此の反面から、健全なる身體は健全なる精神に伴ふと云はるべきもので、此の點に於いて、一切の妄念妄想を除いて心を絶

練心の肝要

對の境に置き、直に宇宙の妙理を會し、無限の法樂を享受する所の禪の根本精神、幷に五體端直、四支格定、鼻息調ひ意念安樂なる坐禪其の物の要術は、之れを心理的よりするも、また生理的よりするも、是より衞生的なるものはないので、禪の修養は實に無病長生身心安樂の祕法妙術たるものである、禪の應用は斯くの如く廣いのであるが、更に筆を洗つて、禪の人生觀を述べ、以て結論としやう。

畢竟如何

結論

第八　禪と人生

一　禪と人格

既に前七章に於いて禪の何ものたるやは一應の觀察を終つたのである。即ち禪の根本原理以上の如く、禪の信仰以上の如く、禪の道德以上の如く而して其の活力の應用され得べきことも以上の如くである。禪とは實に此くの如きものであると知るに足る。が併し畢竟如何、即ちこれを體得しこれを實踐して實人生に處することの如何に就いて更に述ぶる所あるを要す

禪病に陷るの徒

るので、以て本書の結論とすべく、更に此の一章を設くる所以である。

禪學とか參禪とかいふことが近來よほど流行して來たやうであるが、其の多くの謂ふ所を聞くに、是れ意志鍛錬の爲めであるといふ。或は是れ精神統一の爲めであろといふ。或はまた紛々たる世俗の事を離れて淸閑の風流を樂むが爲めであるとも云ふ。其れらは實に禪の眞意を解せざるものである。禪那は靜慮の義、由來禪には超世間的の着色を帶びて居ることは爭はれぬ所で、爲めに動もすれば昔から禪者中には多く人生の實務を蔑視し人間緊要の倫理的條項を顧みず、一種の變人となる者も少くない。是れ固より禪の眞意義に參徹せざる輩、所謂禪病に陷るの徒である。畫餅は遂に口に滿たず、空理空論實際と懸け離れては如何なる妙理巧說も何ら價値な

きものである。禪を修する者、世と疎にして實人生と別なる變人たらば禪の妙諦も半文錢に價せぬものとなる。眞の禪は決して然う云ふものでない前來云へる如く、禪は智情意の圓滿、人格の完全を期するものである。智的にも情意的にも偏せず傾かず、以て眞に合し善を行ひ美を現はすならば實人生に處して深厚なる意義を生じ、價値ある生活が出來ねばならぬ。「寒熱の地獄に通ふ茶びしやくも心なければ苦みもなし」「坐禪せば四條五條の橋の上ゆき〻の人をみ山木に見て」など云ふ類は、一見禪の修養に於いて大に至れるもの〻如くであるが、是れ所謂小乘の無心禪枯木禪で、靈活なる智的の働きも、美しき人間の至情も、すべて强いて之れを休息せんとするものである。而も人間の本性は生きて居る以上斷然之れを息滅することは不可能で、往來の人を深山木に見やうゝて見えるものでない。また何も强いて深山木に見る必要はない。「往來の人をそのまゝに見て」居ればよい美人通るを見ば是れ美人なりとそのまゝ見て心を奪はれず、吾に於いて何かあらん。電車自働車の疾走するを見る、是れ自働車なり電車なりとそのまゝに見て心を止めて狼狽せぬ、何の危險かあらん。すべて物を其のまゝ見て心を取られずして始めて無礙の活動も出來るのである。公案に婆子燒菴の話と云ふがある。一人の老婆多年一禪僧を供養して居たが、常に二八の美人をして給侍せしめ、或る時之れに敎へて云ふ「彼の僧の端坐せる後より抱きつき、「正當恁麼の時作麼生と云へ」と、即ち「斯うしたらどうだ」と云へと敎へた。美人其の通りにすると其の僧平然として、「枯木寒巖に倚

洒落禪

る三冬暖氣なし」と、美人が抱きついたとて恰も老い松が岩に倚つて立つ如くで何ともないと空嘯いて居た。其の時老婆喝して曰ふ「二十年來此の俗物を供養す」と、直に菴を燒いて僧を逐ひ出して仕舞つたといふ。此の僧は美人を美人なりとそのまゝに見て心を動かさぬ所までの修行が未だ出來ず、强ひて深山木に見んとする偏窟な無心禪者であつたのである。

枯木禪は古いものであるが、之れに次いで亦滑稽洒落を以て得たりとする一種の禪病がある。既に達磨と慧可との問答に「吾に安心の法門を授け玉へ」と云へば「心を持ち來れ汝が爲めに安んぜん」と云ふが如き、亦一種の頓智的の問答であるが、後世に至つては祖師意の深遠なる精神を沒却して、徒に頓智滑稽洒落を以て得たりとする弊風を生ずるに至つた。彦根

彦根の頑極和尙

清涼寺の頑極和尙に僧問ふ「如何なるか是れ頑極の頑」和尙曰ふ「がんがらがんのがん」更に問ふ「如何なるか是れ頑極の極」答へて曰ふ「極上の極」と斯くの如き禪味は寒山詩に甚だ多い。また後世わが俳諧者に最も喜ばれた所で、芭蕉の弟子雪中庵は大火に逢うて家屋敷を燒き拂はれた時片手に文臺を片手に藥罐を提げて逃げ出し、或る寺中に落ちついたが、「ひざくらを忘れて靑き柳かな」と口吟して洒々落々として居たと云ふ。また加賀の服部元好と云ふ醫者は、同じく火事に逢うた時、一向平氣で居るので或る人が「お醫者さん家の黑燒何にする」と揶揄ふと「大工左官の腹藥なり」と答へたと云ふ話もある。是れ亦洒落禪の風であるが、斯の種の禪味は西山宗因、十返舍一九等の言行には非常に多い。宗因の辭世に「宗因は

宗因及一九の辭世

どちらへと人の問ふならば、チト用ありてあの世へと云へ」とあり、一九の辭世に「この世をばどりやお暇にせん香の烟と共にハイ左樣なら」とある如き、死ぬまで此の世を茶化して居るものである、殊に洒々落々滑稽の親玉として有名なのは彼の一休和尚と蜷川新左衞門の問答である。或る時一休の菴に在る所の竹の根が蔓つて蜷川の垣内に筍が二本生えた。蜷川之れを見るや一刀を提へて垣の下に至り大聲に罵つて曰ふ「汝隣家の子息ながら無斷にして垣を潛り他人の地を犯す條奇怪千萬である、手打に致すから左樣心得ろ」と忽ち切り取つてしまつた。一休和尚のことであるからただでは濟まさぬ。早速蜷川方へ押しかけ來り、「承はれば手前忰御家の庭內に亂入し御手打に成つたる由、まことに不憫ながら是非ちなし、せめては

一休と蜷川の洒落

此の親心に免じて死骸なりとも御下げ下さるやう」と申し入れた。所が蜷川は「イヤ親御の御心中は幾重にも御察し申す、但し死骸の儀は彼れ是れ御面倒と存し只今釜うでと致して取り片付けて御座る、切角の御望みなれば着衣だけは紀念の爲めに御返し申す」と云つて筍の皮だけを渡したといふ。斯かる話は一休蜷川の問答には非常に多くあるが、勿論後人の假托揑造であらう、兎に角斯くの如き滑稽頓智を以て得たりとする禪風が一時隨分流行したものであるが、是くの如きは人生の實事に甚だ不眞面で、固より圓滿なる人格修養は出來ぬものである。また一種看話禪なるものがあるこれは公案と稱する古人の話頭を一則づつ悟つて梯子上り的に修行するので、一に亦待悟禪とも云ふ。之れと相對して亦默照禪なるものあり、不待

看話禪と默照禪

悟の禪と稱し唯默然として正身端坐する當處是れ正傳三昧と稱して居る。

看話禪は南宋の初頃大慧宗杲禪師が吹唱する所、默照禪は同時に並び立つた宏智正覺禪師の唱道する所であつたが、宗杲宏智共に一代の英傑、それぞれ門風を擧揚し、各其の徒を敎ふる手段を異にしたと云ふまでゞ、其の眞意に至つては固より別途のものでない、然るに其門下の者互に相嫉視して宗杲の徒は宏智の門風を默照の邪禪と罵り、宏智の徒亦宗杲の徒に酬ゆるに待悟禪看話禪の名を以てして之れを嘲つた。後世に至つては愈〻宗杲宏智の眞意を失ひ、一方は少しく省悟あれば徹底大悟した如く、傲慢不遜となり、取り留めなき空言放語を弄し、所謂駄法螺を吹いて以て得たりとし、他方は實人生に觸着することを忘れ無事是れ貴人と構へて土偶木佛の如くになり、共に以て智情意の圓滿を期するに足らぬ不堅實不得要領な禪病に陷るに至つたのである。

完全なる人格と禪

斯くの如き等の禪的修養は決して完全なる人格を作る所以でない、完全なる人格とは理智と情意との圓滿、即ち心全體の均等整一を得て而して之れを自由自在に體現し、事に應じ物に接して縱横無礙なるを得てゆかねばならぬ。而も外界の事象は實に紛然雜然として捕捉すべからず端睨すべからざるものあり。吾人內面の心識も亦紛然雜然として常に外界に捉はれ事に隨ひ物を逐うて、彼此憎愛是非取捨の見に任せ、或は理智に昏く、或は情意を妄動する。之れを妄想と云ひ迷執と云ふのである。然るに禪の修養は前來屢〻說いた所の萬法歸一の原理に立脚して此の紛然雜然たるものを

迷の起り

洗練し統理して十のものは五に、五のものは三に、三のものは一に之れを統一し纏めて遂に其の絶對一元の根本に歸せしめるのである。試に吾人日常何らか少し複雜なる問題に逢着した時、誰が結びけん白糸の、もつれにもつれて如何ともすべからざるも、端坐瞑想しづやしづしづの小田卷繰りかへすならば、漸次其の緒を得て遂に其の歸する所を得るであらう。元來吾々の迷なるものは物事を二個以上に見るより起るので。道を歩いて居ても一本道なら迷ふ筈がないが、行き盡して路三叉を爲す所に立てば、左せんか右せんか將た眞直ぐに行くべきかと此に迷が起る。吾人の日常生活に於いても、是と云へば非、善と云へば惡、美と云へば醜、眞と云へは僞得と云へば失、乃至前後右左大小長短遠近すべての事相對的である爲めに

土塊を追ふ犬

差別に差別を加へそれからそれへと迷ひ入る。之れを狂狗土塊を逐ふと名ける。街頭の犬に土塊を擲げつけると、擲げた人を知らずして其の土塊に嚙みつくやうなもので、差別の妄見は末から末と逐廻はしつけ纏うて遂に其の本を忘るゝに至る。禪の智的修養は此の紛々たる差別事象に處し、快刀亂麻を斷つ如く、兩頭共に截斷して直に其の根本絶對の處に立ち還る。恰も孤峰頂上に立つて一切を下瞰する如く、何事に處しても大觀し達觀するのである。既によく大觀し達觀して前來述べ來れる禪の教理を體得し禪の信仰が確立するならば、如何なる事象に處するも狼狽するの迷ふのと云ふことはない。所謂迷信の如きものは絶對に受けつけぬ。また自ら見ることと明にして自ら信ずること篤きものであるから何者に對しても確乎拔くべ

からざる大見識を有つことが出來る。或る人が一日轉宅をしやうとすると其母が方角を見て宜しくないとて非常に心痛して居る。ソコで方角除けの守札を菩提寺から受けて來て、轉宅した家に貼つたので母親も大に安心して何事もなかつた。後から其の守札を開いて見た所が中には

迷故三界城。悟故十方空。本來無東西。何處有南北。

の一偈が書いてあつたといふ。禪智を以て達觀するときは何ら迷信も不思議もない。

無着と黄蘗

無着和尚粥を煑る時、釜の上に文殊菩薩が出現した。無着持つたる大杓子を以て一擊に打ち下し、「釋迦彌勒も亦打せむ」と言つたといふ。また黄蘗の希運禪師曾て天臺山に遊びし時、道に一人の雲水僧と同伴になつたが、大なる谷川の邊に到つたとき、水勢頗る急にして而も渡るべき橋もない。黄蘗少し躇躊して居ると其の雲水は「サア渡りませう」と衣をかかげて水上を行くこと平地の如く、中途より黄蘗と顧みて「早く渡り給へ」と云ふ、黄蘗大に憤り「おのれ羅漢なりと知りたらば早く汝が脚を打ち折り吳れんものを」と云つた所が、彼の僧は「眞に是れ大乘の法器なり」と讃歎して何くともなく消え去つたといふ。これらの話頭は支那の傳說で固より歷史的事實とは見られぬが、禪の見智よりすれば一切の變幻奇特を許さぬといふことを示したものとして見るに足るものである。

誠拙和尚の逸話

また前に布施の處で例に擧げた鎌倉圓覺寺の誠拙和尚は、伊豫宇和島の生れであるが藩主伊達公が佛海寺の靈印和尚を訪うて種々物語のあつた時、誠拙はまだ可愛らしい小僧で和尚に近侍して居た。藩主此の小僧を顧みて肩を打てと

命じ、其の時云ふやう「予此の度江戸表へ出府致すにより其の方に善き法衣を買うて取らする。其のつもりで能く肩を打て」と、斯くて公江戸より歸藩の後また佛海寺に詣でられ靈印和尚と對話の時に復た誠拙に肩を打てと命じた。小僧肩を打ちながら「殿様先日御約束の法衣は如何で御座いますと」といふに、「イヤ遂ひ失念致して買はなかつた」と云ふや否や小僧大に怒り「此の野郎武士の風上に置けぬ二言を吐く奴」と藩主の頭をポカリと擲りつけた。靈印和尚は驚天して小僧を叱り藩主に無禮を謝して只管手打にでもなりはせぬかと心配して居たが、藩公は「これは予が惡かつた、小僧許せよ、此の宇和島にて予の頭に鐵拳を加へる者は此の小僧一人である見處のある奴だ、和尚隨分目をかけて育てゝ遣されよ」と言はれた、と云

ふ逸話がある。此は少し亂暴のやうであるが、さすがは近代の大德と云はれる誠拙和尚、幼にして既に此の大見識があつたのである。また雪潭和尚が犬山侯の御前に法を講ぜんとせられし時、侯は垂簾の中に座を占めて聽かれんとせしに、和尚大に罵つて「わが法には糟は無い、漉して聽くには及ばぬ」と言ひ放つたと云ふ話もある。權勢に阿らず、自己の言ふ可きことは流々として能く言ひ少しも假借せぬ所、亦禪の一見識である。

知識を整頓し統一して自己の價値と權威とを定め、孤峰頂上に立つて一切を下瞰する禪者の胸中は實に廓然大公物來つて順應すと云ふべき境界で從つて無私の至情を以て萬物萬象を美化し階和せしむることが出來る。即ち無私大公の大精神は人を知るの明、自ら知るの哲なるを得、同時に他を

利し自ら利するの大同情大慈悲となつて一切を潤すのである。佛は「三界は我有なり其中の衆生は悉く是れ吾子なり」と言はれたが、此の大慈悲心、即ち佛心を以て心とし

慈悲の目に惡しと思ふ者ぞなき
罪ある身こそなほあはれなれ

と云ふ風に如何なる者をも哀憐し博愛衆に及ぼすの溫き至情を以てすべてを見るに至る。是れ實に禪的人格の理想的要素でなければならぬ。優陀那院日輝上人の處に隨從參學の若僧で一人盜癖ある者があつて、毎日同學の者の品物が、今日も無くなつた、また紛失したと毎日のやうであつた。遂には一同の者も其の犯人をそれと悟り大に憤つて日輝上人の前に出で、どうかあの賊僧を趕ひ出して下されと願つた所が、上人は宜しいと諾されたばかりで何の處置もなされぬ。度々請求に及んだがたゞ返事ばかりで一向賊僧を追放する氣勢が見えぬので、同學僧は遂に意を決し、「斯くまで御願して彼の賊僧を逐はれぬとならば、今は私共が御暇を頂いて下山するより致方がない、私共は最早一日も賊僧と同安居は出來ませぬ」と申し出でた然るに上人は「あゝ然うか、それならばお前達は出てゆくが宜い」との挨拶に一同は呆れて「師は何故に罪なき清衆を下山させてまでもあの一人の賊僧を左樣に庇はれるか、御意見を承り度い」と云ふと、上人の答に「それは私も罪なきお前達を出し度くはないが、あの盜癖ある僧は尙ほ更出すわけにはゆかぬ、と云ふのはお前達は智德も相應に出來、行に何の傷もな

日輝上人の慈悲

愚子ほど可愛い

くて何處へ行くも立派に通れるから此處を出たとて一向困ることはないがあの一人は今此處を出れば必ず盜賊の罪によつて一日も安き日は送れまい私の手許に置いてやればこそ兎に角あゝして居られる。私は彼れが可哀相でならぬ。どうかして彼の惡癖を直して眞人間にしてやり度いと思ふ。皆が斯うして私の處で修行するのも、互に蒙を啓き非を矯めて正しき道に入らんが爲めである。彼も切角緣あつて私を賴つて來たものであるから、彼の正しき道に踏み入るまでは手放すことは出來ぬ」とあつたので、一同の者は今に始めぬ師の慈念廣大なるに歎服し、改めて前言の淺劣妄昧なるを謝して引きつゞき安居を許されんことを願つた。而して彼の賊僧も此の事を聞いて長夜の迷夢頓に覺め、上人と大衆の前に躍つて出で、悉く先非を

諸禪師の勝蹟

發露懺悔し、專心至誠、正道參學に勉めて後には天晴知識となつたと云ふ話がある。近世の大德盤桂禪師にも播州の結制安居に於いてこれと同樣の逸話があるが、其の他榮西禪師が「佛が困窮頻死の衆生を見ば親ら手を折り足を摧いても施すであらう」と云つて藥師如來の白毫を拔き取つて尾羽打ち枯らした浪人に施したことや、鐵眼禪師が一切藏經の勝緣を結ばん爲めに廣く有志を募つた資財を洪水饑饉の爲めに窮民に殘らず施與し、前後三回に及んで遂に今遺れる所謂黃檗の活藏經を完成した話や、白隱禪師があられもない姦通の濡衣を被せられながら、怒り恨む心もなく、嬰兒を懷にして愛育した話など、禪宗高僧には廣大なる慈悲同情の美しき逸話が澤山ある。實に禪的修養の出來た人格には斯くの如き忘我的な美しき至

情の湧然たるものあつて、春雨春風百草滋茂し萬花開發するが如く、隨類對機一切を救濟し敎化し感動せしめるのである。世に慈悲同情の念ほど人を感動せしむるものはない、是れ實に佛の心である、佛の命である、而して實に禪の理想とする所は此かる人格中心主義である。

堅固不拔の意志

次に禪の修養は前にも云つた如く殆ど命懸けで、堅固不拔の意志がなければならぬ。禪は實參實究で決して空理空論でない。知識を整頓し感情を陶冶して如何に立派な精神になつても、之れを實行し體現する强行的意志があつて、如何なる場合と雖も屈せず撓まず、悠々又閑々急がず迫らずしてよく事の宜しきを得ねば何にもならぬ。

一休和尙といへば誰でも直に滑稽の親玉、洒落の權化の如く思ふが、和尙があの圓轉滑脫の境地に至るまでには實に慘憺たる苦行をせられた。つまり非常な固き意志を以て築き上げられたのである。一休和尙若年にして求道向上の念切にして必ず大悟徹底せんと專一工夫辨道せられたが中々悟れない。ソコで江州石山寺に參籠して三七日の斷食を爲し、觀音大士に願懸けして懸命に坐禪工夫した。いよ〳〵滿願となつたが遂に悟れなかつた一休大に落膽して、今は觀音大士の御冥助にも預れぬ惡業多き身、迚も今生にては得道の望みなしと、絕望のあまり瀨多の長橋より一思ひに身を躍らせて入水せんとした時、計らずも知己の僧に抱き止められ「それほどに思ふなら此で死んだと思つて今一度堅田善光庵の曇華和尙に就いて一修行して見られよ、其の上所得なくんば其の時こそ自殺をもすべし」との懇切

一休和尚の修行

なる勸めによつて「尤もなり」と堅田に到つて曇華和尚を尋ね是非にと安居を願つたがどうしても許されない。許されぬとて素より決死で來た一休は空しく引き退かれうか、「死すとも此處動くまじ」と門側に端坐して頑として動かぬ。三日經ち四日過ぎても去らぬ。一日曇華和尚外出して之れを見、「此の坊主當山に置かぬと云ふに未だ其處に居るか、疾く〳〵去れ」と叱りつけて出て行つたが歸りに見れば一休依然として端坐して居る。曇華和尚は更に怒鳴り散らしたが一休いつかな坐を立たぬ。曇華和尚は「此の上は立つやうにして立たして見せる」と、折柄寒風冷氣骨を砭し身を斫るが如き頃なるに亂暴にも手桶に冷水を汲み來らしめて「之れでもか」とザブ〳〵頭から打つかけた。曇華も亂暴だが一休も根氣がよい「小拙は元より死を決して來たものです。同じくなら御門前に死ぬのは本望です」と一寸も動かぬ。此に於いてさすがの曇華和尚も一休の凡器ならざるを認め「宜しい、見處のある奴ぢや安居許す」とあつて、それから親參實究の功を積んで遂に大悟徹底するを得たといふ。禪の修養には實に斯くの如き確固不拔の意志が無くてはならぬ。斯くの如き意志を以てし、前述の如く知識を統一し、前述の如き至情に住する禪者の人格は、時に或は快刀亂麻を斷つ如く、時に或は不動山の如く、而して常に春風和照花の如き慈顏を以て群生を度してゆく。知情意圓滿なる人格として、偏なく黨なくよく中正を保ち能く宜しきに適ふのである。

佛眼禪師の逸事

佛源禪師は平素出家に似合はぬ愛錢家吝嗇奴との世評を受けて居たが世

芙蓉禪師の遺偈

評には一向頓着せず、苟も一錢一厘と雖も之れを地下の土甕に納め、いよいよ惜みます〳〵貯蓄した。そのうちに寺が火災に罹つて全燒した。サア再建せねばならぬといふので檀家を集めて相談を始めたが、其の時禪師は平素自己の眼睛の如く護惜して貯藏した例の土甕を悉く掘り出して之れを伽藍再築の資に投じた。而して貯財の意義を說示し「君子は財を惜む、之れを用ふるに道あればなり」と言はれたといふことである。斯くの如きは智情意を圓滿に働かせたので、自ら合理と信ずる所、自ら省みて疚しからざる至情を以てし、他の毀譽褒貶を顧みず、以て中正の道を行ふものと謂ふべきである。●●●●芙蓉道楷禪師の遺偈に

吾れ年七十六、世緣今已に定まる、生きて天堂を愛せず、死して地獄を

胸中天空海濶

怕れず、手を撒し身を橫ふ三界の外。騰々任運何ぞ拘束せむ。

とあるが、禪的得道の士の胸中は天空海濶、眞に生死を透脫し、煩惱即菩提の境に安住し、而も物を明察して談らず、他に同情して自利々他を並行せしめ、堅忍確固の意志を以て之れを體現し實踐してゆく、即ち智情意圓滿の人格を以て眞善美の眞理妙諦と合致す　こと、是れ禪の理想的修養である。

二　禪と處世

禪の教理、禪の信仰、禪の修養は實に理想的人格を完成するのであるが斯くの如く修養し、完成した人格を以て如何に此の實人生に處してゆくか其の實踐的要項は道德の條下に於いて詳しく說いたので略〻明かであるが

幸福なる生活

單に道德とか倫理とか云ふと何となく理窟ッポク聞え、義務とか本務とか云はゞ如何にも窮屈な意味が伴ふことを免れぬ。然るに禪の信仰に立脚し禪理に則つて禪の道德を實踐し、禪的修養の出來た人格を以て世に處してゆくならば、何ら拘はれたやうな氣持もなく、所謂ネバナラヌの窮屈な考へも出でず、衷心喜悅の情、否な寧ろ感謝の念を以て日常幸福なる生活が營み得られるのである。

智恩感謝

感謝と云へば勿論知恩と云ふことを豫想した語である。然り知恩といふことは啻に禪の實踐的根本思想を爲すのみならず、佛教の信仰の根本を爲すものである。特り佛教に限らず、基督教でも儒教でも、すべての教は皆知恩感謝の意味を說かぬはない。併し其の說の淺深程度に於いて皆佛教の

輪廻說

如く廣遠でない。兎に角吾々人間が一日この世に在れば、すべての方面から觀察して多くの意味から多くの恩を受けつゝあるものであることを知らねばならぬ。佛教では何宗を問はず皆輪廻と云ふことを說くが、輪廻說からすれば、吾々が生々世々の間には或は牛にも生れたであらう。或は馬にも生れたであらう。或は狗にも猫にも、又は更に下等なる動物蛆蟲のやうなものにも生れたかも知れぬ。然るに今生に於いて萬物の靈長たる人間の身を受け得たことは大なる幸福で非常な恩と謂はねばならぬ。又同じ人間でも種々の憐むべき不具者があるのに、眼鼻耳口手足揃うて一人前の人間と生れたものは更に非常な恩を感ぜねばならぬ。更に究めて見れば此の肉身の中に靈妙なる心を宿して善惡邪正の辨別をなし悲喜苦樂を撰擇するこ

一身の智恩

とを得るといふことも亦甚大なる幸福で非常な恩と謂はねばならぬ。吾が一身の存在に就いて考へて見ても既に斯くの如き多大の恩を擔ひつゝある而して吾々の一身は一身獨り存在するを得るものでなく、一身の外、周圍から受くる種々の條件から亦多大な恩を受けて存在して居るものである。

父母の恩

其れら多くの恩を大約して佛教では四恩と云ふことを說く、四恩とは父母の恩、國王の恩、三寶の恩、衆生の恩であるが、吾々の周圍の關係から受くる所の最も直接せる恩は父母の恩である。父母無くんば吾が現在の身心はない。吾が一身の存在の根本は父母で、父母は吾々に甚大なる恩德を與ふる所の唯一主體である。吾々の一身の出來る根本が既に父母の恩德なるのみならず、吾々が漸く成長し自由に行動の出來るまでの父母の恩德は實に筆舌の及ぶ能はざる程廣大なものである。

子を思ふ言葉

汝朝に出でゝ晩く來れば吾れ門に倚つて望む、汝暮に出でゝ還らざれば吾れ閭に倚つて望む。

と支那の王孫賈が其の子に言ひし如く

世の中に思ひあれども子をこふる
思ひにまさる思ひなきかな

と紀貫之が其の子の死したるを悲める母に代りて歌ひし如く

蜻蛉つり今日は何處まで行つたやら

と加賀の千代が其の亡き愛兒のことを思ひ出して歎きたる如く、げに燒野の雉子夜の鶴、子故には吾が身の迷ふをも忘れるは親心、親の其の子を思

ふ慈愛の情は實に痛切なものである。父母はこの慈愛の念を以て吾々が生れ落つるから其の身の勞劬を忘れて愛護養育して呉れた、其の恩德の高大なること實に山よりも高く海よりも深しと謂ふもおろかである。此の高大なる恩德に感謝し報答するは元より子たるもの〻至情でなければならぬ。

次に國王の恩、即ち國民として其の國の統治者から受くる恩德は高大にして感謝せねばならぬことである。吾々は人間に生れたことが非常な幸福であるが、更に同じ生れるにも太古禽獸と相距る遠からざる時代でなくて此の開明の世に生れ、文物制度よく整頓せる文明國民として日々安樂に世に處するを得ることは實に廣大なる幸福である。而して其の幸福は一に國王の御恩德によるもので、殊にわが帝國は建國二千五百七十有餘年の其の

以前より、上、皇室の下萬民を憐み玉ひ愛護し給ふこと、赤子に異ならず代々の聖天子の御逸事御製等を拜しても、吾々等臣民たるもの只管感泣に堪えぬ所で、此の上下の君德臣道相合して萬國無比の國體の精華を發揮して來たのが實にわが日本帝國である。われ〳〵帝國民は此の君恩の廣大なるを想ひ奉り、ます〳〵克忠克孝の國民精神を輝かさねばならぬ。此の父母の恩、國王の恩に報ゆると云ふことは報恩の最も吾々一身に直接せる重大なものである。之れに就いては多くを說くまでもなく苟も忠孝一本の上に立つて億兆心を一にせる帝國々民は皆よく心得て居る筈である。

次に三寶の恩であるが、三寶の解釋は前に道德の下で詳說したが此に重出する必要はないが、要するに三寶とは天地自然の根本原則、三大眞理で

宇宙に此の大眞理あればこそ、吾々の一々の行動も其處に始めて無限の意義を生ずる、換言すれば日々夜々吾々は天地自然の廣大なる恩德を受けて居るものである。天漠々として覆ひ、地邈々として載する、是れ廣大なる天地の恩、山高水長、四季流行、風雨露霜、萬物生成化育する、是れ廣大なる自然の恩、動物植物礦物すべてが相關し相助け相倚り互に其の存在を保つ、是れ天地自然の大なる恩、吾々が天地自然から受くる恩德は數へ來れば無限廣大と云はねばならぬ。此の廣大なる恩を感知し之れに報ゆることと、之れを三寶の恩を報ずと云ふのである。如何にするが三寶の恩に報ゆる所以であるかといへば、他なし、天地自然の眞理公道に合致せる行動を爲すに外ならぬ。即ち從上說ける禪の修養により禪の信仰により禪の道德

を行ひ、直に自己心を明らめ、天地宇宙と融合一枚になつた無私大公の人格を築き上げること、是れ三寶の恩を報謝する所以、天地自然の恩德に答ふる意味となるのである。

衆生の恩とは、言ひ換ふれば社會の恩で、吾々日常生活は吾々自らの力ばかりではない。前に萬物相關の道理を說いた如く、萬物萬象相關し諧和せるは天地の眞相、持ちつ持たれつして相助け相倚るは社會の實狀である。故に社會は共同生活なりと謂はれ、吾れ人共に此の共同的の恩惠を受けつ與へつして居るものである。早い話が何人も米を食つて生きて居るが、其の米は米屋から受ける。米屋は百姓衆の作るによつて商買が出來る。百姓の使ふ鋤鍬は鍛冶屋の手によつて製造される。鍬鋤の材料は鑛夫

共同生活

が山から發掘する。鑛夫の着て居る衣は吳服屋から買ふ。吳服屋の居る家は大工が建てる。大工は矢張り米を食つて生きて居る。米屋は百姓が作るので商買が出來るといふ風に無限に相關し相助けて此の社會が成り立つて居るのである。尙前に云へる輪廻說から云つても、生々世々の間には或は父子となり兄弟となり主從となり夫婦となつたかも知れぬ。斯う考へて來る時は吾々が過去現在に於いて一切衆生から受けた所の恩、受けつゝある所の德は甚大と謂はねばならぬ。其の恩德の甚大なるを想へばお互は日夜之れを感謝し之れに報ゆることを考へねばならぬ。即ち其の職の何たるを問はず、其の事の大小に係らず、何でも自分の利益のみならずして同時に社會の爲め人道の爲め、更に廣く言はゞ一切生物の爲めに成るやうなことに意義つけて行動せねばならぬ。

紀國屋と福田屋

有名な紀の國屋文左衞門が江戸の大火を見込んで逸早く山々の材木を買ひ占め、人の必需品たるに乘じて高く賣り付け、一時に巨萬の富を致したといふ、斯くの如き手段は最も惡むべき利己一點張りで、衆生社會の恩德を仇で返す者である。之れに反して大阪の福田屋清六と云ふ材木商は、大阪市中大火に遇うて材木の値が一時に昇騰した時、清六は之れに乘じて大利を貪ることをせず、却つて平素よりも少しく安直で賣つた。或る人が「お前は商人にも似合ぬ鈍馬なことをするぞ、此の際一つウンと儲けたらどうだ」と云ふと清六は、「イヤ其れ位なことは私も知らぬではないが、考へて見れば自分の先祖以來代々此の土地で材木商を營み、此の土地の人々の

お蔭で代々安樂に生計も出來たわけである。然るに今人樣の難儀につけ込んで自分獨りが利を占めるといふのは人情も義理も知らぬ者のすることである。私はせめては日頃受けた御恩報じの一分にもと損さへせねば宜い値段で皆樣の御用途を辨じて居るのだ」と答へたが、市中の人々も之れを傳へ聞いて大に感心し、吾も〳〵と福田屋に注文を申込み、其れ以來引き續いて商買非常の繁昌で、遂に巨萬の富を致したといふ。同じ富を作るにしても紀文の手段とは天地の相違である。宜なる哉紀文大盡と謳はれたのも二代にして亡びて跡形もないに引き返へ、福田屋商店は永く後世まで榮えた、是れ實に社會の共同生活を了解し、天地の公道を實踐したものと謂ふべきである。

智恩に徹底せよ

斯くの如く佛敎の信仰、禪の立場からするときは、一切に對して深く恩德を感じ、感謝怡悅の情湧然として胸に充ち、日々愉快なる生活を送ることが出來る、それに就いて重要なることは、其の知恩感謝の念が徹底せねばならぬことである。君の恩父母の恩社會の恩其の他すべての恩を、恩なり德なりと感じた所で、たゞ其を平面的に感じた知つたと云ふだけでは何もならぬ。所働的にたゞ有り難い忝けないと云ふだけでなく、其の恩の根本由來からして之れを能働的に充分知得せねばならぬ。父母の恩を知るといふ以上は能働的に父母の恩の由來を考へ、その恩の奥底に至つて、今日吾が身の斯くて在り得るには如何に多大なる父母の犧牲が拂はれて居るかどれだけ父母の賜を辱うして居るかと云ふことを徹底して知らねばなら

無抵抗主義を評す

ぬ。果して知恩が徹底すれば其處に始めて報恩感謝の念が痛切に起つて來るので、始めて忠孝仁義の行と現はれて來るのである。

併し知恩々々と云つて、吾が一身の存在から、周圍の事情から、有らゆるもの悉く恩德である感謝せねばならぬと云ふものゝ、若し人が亂暴に自分の權利を侵害し、わが頭を叩くやうなことがあるとき、尙ほ且つ是れ惡人われを叩くにあらず、佛の深き慈悲より來る御恩なり。病氣をする、苦しい、是れ神の思召しである、有り難き御恩であると云ふ風に何でもかんでも悉くたゞ有り難い添けないとして居れと云ふのではない。さう云ふことは生きた人間としては到底出來ないことである、無抵抗主義は消極的な生活の理想としては或は結構かも知れぬが、現實的人類の自然の情ではない、以て天上の理想界に應用出來るか知らぬが、以て地上の敎として吾々人間を導くに足らぬものである。血の通つて居る吾々は叩かれゝば痛さを感ずる、腹も立つ、病氣をすれば苦しくもある。之れを何ともないと平氣で居れぬが人情の自然である。而して叩かれゝば痛からう。病氣なれば苦しからうと同情して貰つて滿足を得るのも亦人情である。こゝに人情の美しい點、人を動かす强い力が在るので、互に相見て同情し合ふと云ふことがやがて徹底して恩義を知ることになり、苦痛相助け歡樂相共にすると云ふ溫き人生が現はれて來る。而して其の恩の最も大なるものは佛恩であるとする。即ち佛とは天地宇宙の眞善美完具圓滿の理想の權化に名けたるもの、佛の道に從ひ佛の行を爲す、是れ佛恩報謝である。佛の道とは天地の

公道、禪の信仰禪の道德である。忠孝仁義の大綱より衆善はすべて佛の道である。日々佛恩を感じ、日々公道正義に依る、是れ佛恩報謝である。既に禪の信仰道德を知るもの、當に此の怡悅感謝の行持報恩の精神を以て世に處せねばならぬ。承陽大師示されて曰ふ

承陽大師の話

今の見佛聞法は佛祖面々の行持より來れる慈恩なり、佛祖若し單傳せずば奈何にしてか今日に至らん、一句の恩尙ほ報謝すべし、一法の恩尙報謝すべし、況や正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せざらんや。

と、吾人が身口意の三業を滌除して佛戒を受け、一超佛位に直入するを得日々佛の行持を行ふことが出來る、是れ無上の佛恩、此の大恩を報謝せずして可からうか。佛位に入つて佛行を行ず、是れ佛、佛に對するのである

桑原冬夏御恩の歌

是れを唯佛與佛乃能究盡と云ふ。始め懺悔して滅罪し、次に受戒して佛位に入り、發願利生となり、而して今行持報恩と爲つた。此に至つて禪の信仰道德は極まるのである。此れに就て桑原冬夏といふ人に御恩の歌と云ふがある、通俗的な卑い調であるが、一文不知の婦女子にもよく解り、味ふべき教訓と思ふから終りに附記して置かう。

ありがたいぞや天地の御恩、人も獸も草木も蟲も、そだてめぐむに隔てはあらぬ、あまり御恩が大きな故に、つねに忘れてうか〳〵暮し、罰が當りて難儀する。

ありがたいぞや國土の御恩、家も家敷も衣類も食も、土が無うては生じやせぬ、飢えず凍えず雨にもぬれず、寢たり起きたり無事安樂に、暮ら

す御恩をあけくれ思へ。

ありがたいぞや御主の御恩、我をそだてる其のやしなひは、雨が降りても旱がしても、親や先祖にまさりてあつく、めぐみ玉はる御恩を思ひ、身をば厭はず忠義を盡せ。

有り難いぞや親御の御恩、我を生んだり育てた苦勞、ねてもさめても唯可愛やと、撫でつさすりつ乳をばふくめ、そだてあげたる御恩を思ひ、力つくして孝行しやれ。

有り難いぞや師匠の御恩、西も東もわきまへ知らず、まよひまどへるおろかなわれを、心つくして教へてたまひ、人の大事の道をば知るも、教無うては誰が知る。

三　禪と幸福

人生の幸福とは何であるか、位高く財餘りあり名聲天下に遍き人、出づるに駟馬安車あり、入つては金殿玉樓に坐し、身に錦繡綾羅を纏ひ口は美酒佳肴に飽く。之れに反し五尺の身包むに襤褸を以てし、三尺の膝伸ぶるに坐席なく、終日糟糠だも飽かずと云ふ乞兒もある。兩者孰れか幸福なると云はゞ何人も其の懸隔對比殆ど答ふる限りに非らずと一笑し去るであらう。併しながら更に一歩を進めて富あり名あり地位あり權力あつて、入つては廟堂に天下の大政を議し、出でゝは衝に樽俎の間に當ると云ふ公侯相將も、退いて家庭の一個人とし社會の一個人として、自ら省み其の精神安靜なるを得ず、或は尚ほ限り無き慾望を追求するに急にして心嘗て滿足を

得ざる者と、身は一個の平民、財餘りあるにあらず、何ら地位名譽あるにあらずと雖も、心自ら疾しき所なく、其の職に忠實にして樂んで業に服し朝に星を戴いて出で夕に月を踏んで歸り、一家團欒和氣靄々九尺二間の賤が伏屋も春風常に和樂の狀ある者と、兩者果して何れか幸福であると云はば未だ遽かに一笑に付し去るべからざる問題となるであらう。ウイリアム・ロバートソン云ふ

人類の至切なる要求は幸福を希ふにあらずして平和を渴望するにあり人心の眞に雄偉剛强なる所以は其の平靜なるにあり、平靜は煩惱と相容れず勞作苦力煩擾を解脫し、慾望なく悔恨なく悲痛なき心狀なり。

と、平靜々々、心常に平和靜穩なるを得て慾望悔恨なき者は眞に幸福である。乃ち幸福とは自ら滿足安靜の精神狀態に在るの謂であるとすることが出來よう。然らば如何にして滿足安靜を得られるかといふに、其は前來九章に渡つて述べ來れる禪の修養に如くはない、禪は誠に人間に滿足を得せしめ人生に幸福を與ふるの無盡藏である。

平靜滿足の精神狀態

既に言はずや宇宙は一大寶藏であると、然り宇宙自然は吾人の要求する幸福平靜滿足の無盡藏である。宇宙の當相其のものが即ち煩悶無く悔恨無き平靜滿足の狀態である。日出月沒風吹き雨降る皆其の然る所以の理ありて未だ嘗て自然は其の原理を違へず、無始無終に平靜滿足の狀態であるではないか。然るに人類の凡愚、從らに私情私慾に驅られ、其の未だ成すべからざるを强いて成さんと欲し、其の未だ到らざるを速に致さんと欲し

夢中の精神狀態

其の未だ滿たざるを敢て滿たさんとする、何ぞ知らん其は皆得んと欲して却つて失ひ、成さんと欲して却つて敗れ、到らんと欲して却つて退き、滿たさんと欲して却つて缺くる所以となるのみである。吾人は夢中に斯ういふことを經驗する、幾十年前の出來事を目前に見、或は幾百里外のことを面り見聞し、或は遠くのことゝ思へば忽ち近くなり、舊いことが忽ち目下のことゝなり、或はまたあられもせぬ空中飛行自在の身となり、或は亦喜怒哀樂の情盛にして忽ち泣き忽ち笑ふ等のことも屢ゝある。夢中の精神狀態は、時間空間が混亂し、理性の働きが喪失せられ、感情の作用のみ旺盛となるのである。俄然として覺め來ればゐゝ夢であつたかと悟るのが常である。然るに吾々通常人の日常生活行動は猶ほ夢中の精神狀態の如きものである。動もすれば理性を昧まして徒に感情に馳せ、空しく過去の事件を追懷して煩悶懊惱し、取り留めなき未來の空想に憧憬し焦心し、忽にして得意となり忽ちにして失意となり、理想と空想と慾望と絶望と、絶えず交錯繼續して嘗て平靜滿足を得ることが出來ぬ、是れ人間通常の狀態である。あゝ人生五十猶ほ夢幻の如しとはまことに所以ある言である。

併しながら南柯一枕、短夢一場覺め來れば其處に追懷空想煩悶憧憬等のすべての混亂せる幻影はサラリと消え失せるのである。吾人一たび躁急齷齪の妄動を靜めて精神を統一し安靜にし、所謂意廣く體胖かになつて情意の平和ゝ理性の明哲とを得ば、其處に天地自然の開放せる無盡寶藏あり、限りなき幸福と滿足が得られるのである。佛とは即ち此の安樂平靜の自然

の妙、宇宙の眞と冥合せるの名である。「坐禪は習禪にはあらず、只是れ安樂の法門なり」とは正に此の平靜滿足の幸福を得るの鍵を與ふる佛の敎である、斯の狀態を解脫といふ。

解脫

吾人は前に主觀客觀の一致、身心不二の法門を說いた。吾人は既に宇宙と吾人の歸一を說いた。吾人は既に現象即實在實在即現象、平等即差別、差別即平等の妙諦を明した。實に禪の敎理は頓に自己身を明らめ、直に宇宙絕大の威靈と渾融し交參するを得ることを述べた。道本圓通、無始已來の貪瞋痴の迷霧四散して朗なる眞如の月を眺め、限りなき佛の慈悲智慧光明に攝取され、一超佛位は直入して、佛作用を爲し、日々好日怡悅和樂の生涯を營み得るの道を明した。之れを應用して文武技藝の有らゆる方面に縱橫無礙なるを得、之れを活用して精神の修養と肉體の衞生とを均一ならしめ、以て智情意圓滿の人格となり、以て福壽無量なるを得べき祕要を示した。誠に從上說き去り述べ來れる九章の禪理に實考實究して幾分にても之を體得し實現し得るものは、あゝ幸福なる哉、人生の幸福何ものか之れに過ぐるものあらう。

無常は活動なり

世人動もすれば生老病死無常變化の世相を見て悲觀し愁傷する。而も人生變化常なく、生あり老あり死あるは萬物進化の法則行はるゝ所以、人類の生命あり活動ある所以である。若し人生に生死變化の相無くんば人は生長もなく發達もなき死物となり了るであらう。如何が生死を明らめん、承陽大師の垂示に曰ふ

生死透脫

生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因緣なり、生死の中に佛あれば生死なし、生死即涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ふべきもなし、此時始めて生死を離るゝ分あり。

と、前來屢〻說述せる如く、禪の教理禪の信仰は直に生死透脫の法門である、生死のうちに在つて涅槃を證し、煩惱の身を以て菩提を得、沙婆即寂光土に逍遙することが出來る、是れに過ぎた幸福はない。

世人動もすれば不如意を唧つ、實に人生萬事意の如くならざるは常態である。然れども想へ不如意なればこそ吾人は常に安らけく世に處するを得るのである。人その心の同じからざる如く、亦各其の望を異にする。各人各異の心を以て各人各異の希求慾望をして悉く意の如く成るものと假定せんか、人生は大混亂の狀態となり、社會の秩序も安寧も一日として保たれないであらう。幸にして天地には嚴然たる法則あり、宇宙には整然たる秩序あり以て此の大混亂を許さぬ。各人の勝手に意の如くなるを許さぬ。而も自然の法則は其の成るべきを成し、滿たすべきを滿たして寸毫の私はない。人若し放僻邪侈我儘勝手の念を棄て、無私大公の天地自然の大道を實踐し、努力向上するならば、幸福は期せずして其の身邊に纏ひ來るのである、ラスキンの語に

ラスキンの語

眞の教育の目的は單に人をして正當の行を爲さしむるのみにあらず、正義を樂ましむるにあり、人をして單に謹勉ならしむるのみならず、謹勉を樂ましむるにあり、人をして單に博學ならしむるのみならず、知識を

愛せしむるにあり、人をして單に潔白ならしむるのみにあらず、潔白を愛せしむるにあり、人をして單に正直ならしむるのみにあらず、正直を渇望し欽仰せしむるにあり。

とあるが、此くの如き身行に伴ふに心操を以てせば不如意は忽ち幸福と化し來るであらう。

座右の銘

或る農學士が作つた座右の銘なるものを見るに

一分の善は九分の惡に勝つ。
二分の借は八分の貸より怖るべし。
三分の堪忍に七分の得あり。
四分〳〵しては何事も成らず。

事物の本末を辨ずべし

五分〳〵の智慧を十分に使へ。
六分の正直に擔保要らず。
七分の暮しに不足なし。
八分の腹に醫者要らず。
九分にて足れば間違なし。
十分の働きに貧乏逐ひつかず。

と云ふのがあつたが、人常に斯くの如き心掛けで實際に處して往つたならば亦是れ甚大なる幸福を得る所以となるであらう。

世人多くは事の本末を辨せず物の始終を顚倒し、徒に其の終りを追うて始を忘れ、空しく其の枝末を求めて根本を等閑にする。諸の煩惱苦痛悲境

は主として其の始め忽起の一念迷妄を惹くより起る。然るに其の心の本を措いて唯其の枝末たる現在の狀態にのみ拘はり苦慮し焦心するは愚と謂ふべく、爲めに煩惱迷妄はいよ〳〵益〻深く厚くなりまさるのみである。約言すれば、世の多くの事は人の心からであると云ふを得べきである。新羅元曉禪師四方行脚の時、一夜塚間に露宿したが、非常に渴を覺えたので其の邊に水もがなと尋ね覓めた所が幸に水精のやうな良き水の一溜りを見出し、大に喜んで之れを掬し飲み、甘露の如き味に舌うちしてやがて肱を枕に眠に就いた。翌朝起き出でゝ昨夜の水を見るに何ぞ計らん、水精の如き清水と見たは一個の髑髏中に溜まつた汚水であつた。それを知ると元曉俄に嘔吐を催すほど不快を感じたが、沈思良久こゝに省悟する所あり、乃

元曉禪師

ち一偈を打して曰ふ

心生則種々法生。　心滅則髑髏不二。

と、頓に心氣爽快なるを得たといふ逸話がある。狂歌にいふ

酒飲めばいつも心が春めいて
借金取りもうぐひすの聲

借金取が閻魔面で嗄聲を出して怒鳴り立てる、豈嚠喨綿蠻たる黃鳥の囀語を比すべけんや、たゞ是れ其の心の悠然寬和を以て然るのみ。圓覺經にも次の如く

圓覺經の文

心清淨なるが故に一身清淨なり、一身清淨なるが故に一世界清淨なり、乃至、虛空を盡し三世を圓裹して切に清淨にして動かず。

開運と人心

と說かれてある。或る意味からすれば心は猶ほ機關車の如く、身は餘の列車の如しと云ふべき場合が實際吾々の日常生活に最も多い。順境に處しては心驕り、逆境に在りては心悲む、心驕るが故に敗れ心悲むが故に傷ふ、皆心からである、天地間動かすべからざる自然の法則ありて人意の恣にするを許さずと雖も、此の法則あるが故に亦善惡因果歷然として必ず酬ひられ、積善に餘慶を見、積不善に餘殃を貽す。運は本と天に在りと雖も之れを啓くは各人の心に在り、目前の利害得失順逆苦樂の境に心を奪はれず、確固たる意志を以てし、自ら省みて眞善美に背馳せざる行動に出でんことを心掛け、終始一誠以て貫くならば、嘗て煩悶懊惱することを要せず嘗て驕慢放侈ならず、身心常に安舒たるを得るであらう。斯の修養法如何

人間生活の五段階

といふに前來詳述せる禪の教理に依り心意識を靜整し、直に無私大公の眞道に合するに若くはない。斯くて身邊すべて是れ不如意なりと見たるものは忽ちにして悉く滿足となり、事毎に缺陷なりと見しものすべて圓滿となる。不如意を轉じて滿足ならしめ、缺陷を變じて圓滿と爲す、人生豈是れに過ぐる大なる幸福があらうか。

或る一面よりの觀察によれば、人間生活には蓋し五段階を分け得られる第一は無能力的生活、此は生れ落ちた嬰孩より、是非曲直未辨の少年時代の生活、及び低能と狂人、即ち人間一人前の能力なき者の生活で、未だ以て論ずるに足らぬものである。第二は罪惡的生活、此は法律上の罪人を云ふので、普通人間の能力を有ちながら正しき人間の道を踏まず、詐僞、横

領、賭博、火付、强竊盜、殺人等の罪惡を犯し、其の他國家の法律に問はるゝ如き行爲を爲す者の生活である、是れ普通人間の最も下劣なものであることは謂ふまでもない。次に法律的生活、此は普通人間の生活で、法律にも觸れず、表面何の缺點もなく正業に從事して居る連中である、併し其は單に表面のみのことで、苟も法律にさへ牴觸せねば如何なることも敢て行る、如何なることをしてもたゞ法律の網をうまく潛ればよいといふ生活で、其の心事は太だ惡むべきものあり、斯の段階の生活より恐るべき害毒を社會に流すことが非常に多い。次には道德的生活、此に到ると單に法律に觸れさへせねばよいといふばかりでなく、道德上の罪も敢て犯さぬといふので、よほど精神的で淸淨な高尙な生活である、所で法律には强行力がある、即ち此れ〳〵の事を爲せばそれ〴〵の刑に處すといふ制裁が伴ふが道德には此の强行力が無い。尤も道德にも制裁は無いことはない。所謂社會的制裁である、あまり不人情な沒義道なことをすると社會隣人が許さぬ、社會から指彈せられ擯斥せられて名望信用を失墜する、故に已むを得ず心ならずも道德的行爲をする。所が今日の如く社會制裁が弱くなつて人々利に是れ就き義を顧みぬといふ有樣になつては、道德は漸く頽廢するを免れぬ、道德を振起せんと欲せば先づ輿論を健全にし、社會的制裁を强からしめねばならぬ。併しながら社會的制裁を恐れるが爲めに已むを得ず心ならず道德を行ふといふのは未だ眞の道德でない、已むを得ず心ならず行ふのは所謂僞善である、實際世間には斯の僞善者僞道德家が非常に多い

宗教的生活

眞の道徳は第五段階に數ふべき宗教的生活に入つて始めて行はれるのである、宗教的生活に入るものは其の行動清淨高尚であつて曾て爲めにする所ある行爲を取らぬ、利の爲めに道徳を行ふのでない、名の爲めに物を施し人を救ふのでない、たゞ道の爲めに道を行ふのである、人と神と一體である。我と佛と同一本法性である。斯く行ふが當然である。當然の行爲を爲すに何の爲めといふことはない、人間として人間の道を行ふのである佛子として佛の道を行ふのである。五尺の身を以て直に絶大悠久なる天地宇宙の威靈と交參し、直に天地宇宙大公の道を行ふのであるといふ自信と自明とを以て正しき道を實踐する。是れ禪の安心で、前來述ぶる如く徹底知恩感謝の生活を爲すに至つて極まるのである。孟子の所謂「威武も屈する能はず、貧賤も移すこと能はず、富貴も淫すること能はざる、此れ之れを大丈夫と謂ふ」とある如き、韓退之の謂所「自ら知ること明にして道を信ずること篤き」者といふも此の道の爲めに道を行ふので、曾て天下の毀譽褒貶に關せざる高潔なる精神生活を指したものである。

歴山大王

世に高潔なる精神生活ほど偉大なるものはない、歴山大王は兵を用ふること鬼神の如く敵として敗らざるなく城として拔かざるなく大陸を征服して馬をインダス河に飲ふに至つたといふが、其の壯は則ち壯なりと謂ふべきもたゞ是れ物質的名利の偉業であるに過ぎない。英雄頭を廻らせば即ち神仙、彼のダイオゼネス――蓬頭襤褸一個の桶を家とせる乞食哲學者ダイオゼネスと問答し、ダイオゼネスが「吾れ何物も望むなし、唯請ふ大王吾

奈破翁

が前に立つてわが受くる日光の暖を妨ぐる勿れ」と言ふを聞いて感歎し「吾れ若し歴山大王たるを得ずんば則ちダイオゼネスたらむ」と叫びたる如き、さすがは歴山大王、精神生活の偉大なる力あり絶大なる幸福を味ふべき所以を知つたのである。而して其の最後や歳僅かに三十三、大鵬の翼將に大に展べんとするに當つてその部下の爲めに斃れたのは亦憐むべきではないか。また彼のナポレオン一世を見よ、一介の青年士官より遂に佛蘭西皇帝の位に昇り、其の旺溢せる覇氣は能く一瀉して歐洲大陸を蹂躙した。其の功業偉大なりと謂ふべきである。而もウオータルローの一敗、遂にセントヘレナの孤島に遣る瀬なき配處の月を眺むる身となり、つくづくと追懐顧望して

今我人を離れて獨りヘレナの島守となりたれば、誰一人も我爲めに死なんとするものなし、基督は然らず、其の世を去りて以來二千年に垂んとすれども猶ほ彼が爲めには死せんことを願ふもの幾百萬あるを知らず。と長大息し、其のいよ〳〵臨終に及んでは人事不省の中に於いて其の妻の名ジョセヒン、軍隊、佛蘭西など〻叫びつ〻息を引き取つたといふは、亦憐れではないか。またわが豐臣秀吉の如きも、東洋の歴山大王と稱せらるるほどの英雄、身微賤より起り群雄を征服して戰亂を截定し、餘威雞林七道を席巻し更に大明四百餘州に及ばんとした、誠に絶世の雄圖と謂ふべきである、而かも其の辭世に言ふところを見ずや。

つゆとおき露と消えぬる人の世や

なにはのことは夢のまたゆめ

と、げに豐公の功業富貴は夢の夢となつて、其の子秀頼に至つて敢なく滅亡を見た。あゝ古今の所謂英雄、各〻其の功業や偉なり壯なりと雖も、其の偉功壯業、今果して如何、眞に如夢幻泡影と云ふもおろかである。之れに反しソークラテスを見よ、孔子を見よ、其の他君子賢哲の後世に遺せる力の如何に大なるかを見よ、更に釋迦や基督の宗教的感化力の天下の人心を無限に支配することの如何に甚大なるかを見よ、精神生活の高遠にして偉大悠久なるものあるは明かに知るべきではないか。

自重自信せよ

世人動もすれば自ら卑屈にし、自重自信の念を捨てるは愚である。昔し陳陟吳廣の憤起して、討秦軍の卒先たるや、叫んで曰ふ「王侯將相寧ぞ種あらんや」と、陳吳の器は小である。其の理想王侯將相の地位名譽に在つたに過ぎぬが、其の意氣は稱するに足る。吾々も此の意氣を以て自ら卑屈惰弱にし去らず、英雄豈種あらんや、聖賢豈種あらんやと憤起し、而して我は是れ英雄たるべき者、聖賢たり得べきものと自信し自重せねばならぬ

我は當成の佛

前にも言ひし如く「我は是れ已成の佛、汝は是れ當成の佛」と梵網經に說かれてあり、又龍牙和尙は「古佛未だ悟らざれば今者に同じ、悟り了れば今人即古人なり」と言うて居る。舜何人ぞ堯何人ぞ、彼も人なり我も人なり、佛とは何ぞ已に成れる佛なり、我とは何ぞ當に成るべきの佛なり。佛たるに於いて前後遲速あるのみ、水流れて本と海に歸す、海に入れば四河百川同一鹹味となる。本來本法性のとき何れの處にか凡聖迷悟あらんや。

ルーテルの語

と、此自信自重の心あつて始めて向上も出來努力も致され、遂に理想の樂園に逍遙することも出來るのである。ルーテル曰ふ

人心は猶ほ水車の石臼の如し、小麥を以て其の下に置けば廻り〳〵て之れを挽く、然れども小麥を入れざれば廻り〳〵て其の自身を挽き壞るに至る。

基督の語

と、自重自信を以て水車と爲し道義を小麥と爲す者は向上し、然らざる者は自ら自滅を招き永却の沈淪を免れぬものである。基督の曰く

神の國は顯はれて來るものにあらず、此に見よ彼に見よと人の言ふべきものにあらず、夫れ神の國は爾等の裏にあり。

と、唯一神觀すら猶ほ之れを言ふ。更に最も合理的神觀を爲す佛敎、殊に

即身是佛

禪に於いては直に即身是佛と言ひ、娑婆即寂光淨土と云ふ。此に安心が立ち此に愉樂幸福を見得するのである。諸公の語に

即心即佛を解せざれば驢に騎りて驢を覓むるに似たり。

と、我と佛と到底別なりとして自ら卑屈にし向上することを知らざる者は猶ほ驢に騎りて驢を覓むるの至愚者である。承陽大師示して曰ふ

見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや、釋迦牟尼佛とは即身是佛なり、即身是佛とは誰と云ふぞと審細に參究すべし、當に佛恩を報ずるにてあらん。

と、繰り返し言ふ如く禪の究極要領は即身是佛、一超直入して佛位に入り佛心を以て佛行を爲すに在る、生死即涅槃煩惱即菩提を證するにぞある佛心とは何ぞ、智情意圓滿したる大慈悲心、大光明である、佛行とは何

ぞ此の大光明を蓋天蓋地ならしめ、この大慈悲心を以て廣く群生を度し自他二利圓滿を行ず。其處に些の煩悶不平なく、名聞利譽の邪念なく、平常心期せずして是れ道となる。孔子の所謂「意の欲する所に從つて矩を踰えず」と云ふに到るのである、此に到つて法喜禪悅無限の法樂幸福に飽き日々好日を送り、悠久の好生涯を營むことを得るのである。

悠久の好生涯

あゝ吾人は既に如上の幸福なる人生を作るべき道を知つた、想へば吾人今日の身心は佛陀の生命である、最尊最上の善身である、此の善身を等閑にし、此の生命を粗末にしてなるべきか、人身得難く佛法値ひ難し、此の善身を得て此の正法を聞くを得ること實に千載の一遇と謂はねばならない而して因果の法則は歴然なり、無常變化の原理は一刻片時も假借する所はない。此れを思ひ被を想ふ時、誰か高潔なる精神生活を憧憬し、悠久なる宗教的生命を相續せんと願はざるべき、承陽大師示して曰ふ

今生の我が身二つなし三つなし。

と、また

最勝の善身

最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ。

と、迷へる者よ、悶へる者よ、惱める者よ、悲める者よ、不平の者よ、不幸の者よ、來れ速に來つて佛祖正傳廣大慈悲門に入り、頓に即身即佛を證し、最も意義あり、最も幸福なる、悠久の人生を作れ。

昔は道元禪師語あり

認二得眼横鼻直一、不二人瞞一、便空手還レ鄕、無二一毫佛法一と、說き去り論じ來

る一場の慨懶、實參實究によりて實修實證、眞箇其地に體達せば正に空手還鄕ならんのみ、禪の活要畢竟奈何、雲は嶺頭に在つて閑不徹、水は巖下に流れて大忙生!!喝!!!

禪學活要〔終〕

大正四年八月十日印刷
大正四年八月廿日發行

禪學活要
定價金壹圓拾錢

著作者　渡邊約山
著作權者　大倉廣三郎
發行者　東京市京橋區南槇町十八番地　大倉廣三郎
印刷者　東京市日本橋區兜町二番地　神谷岩次郎
發行所　東京市京橋區南槇町十八番地　廣文堂書店
振替東京四六八四・電話京橋二四六三
東京印刷株式會社印行

文學博士 井上哲次郎先生著
人格と修養
洋裝函入頗美本 菊判六百八十餘頁 正價金壹圓八拾錢 送料金十二錢

文學博士 久米邦武先生著
時勢と英雄
洋裝函入頗美本 新形四百八十餘頁 正價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

文學博士 高瀨武次郎先生著
王陽明詳傳
洋裝函入頗美本 菊判約三百六十餘頁 正價金壹圓五拾錢 送料金十二錢

文學博士 佐々木信綱先生著
文と筆
洋裝函入頗美本 新形四百六十餘頁 正價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

文學博士 高楠順次郎先生著
道德の眞義
洋裝函入頗美本 菊判約三百頁 正價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

文學博士 小中村清矩先生遺著
有聲錄
クロース綴函入頗美本 菊判全一冊五百餘頁 正價金壹圓五拾錢 送料金二錢

理學博士 横山又二郎先生著
世界に於ける自然の奇觀
クロース綴函入頗美本 菊判全一冊四百餘頁 正價金壹圓五拾錢 送料金十二錢

文學博士 加藤玄智先生著
眞修養と新活動
クロース綴函入頗美本 新形全一冊五百頁 正價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

慶應義塾長 鎌田榮吉先生著
進取論
クロース綴函入頗美本 四六判全一冊四百頁 正價金壹圓參拾錢 送料金八錢

文學士 樋口龍峽先生著
近代思想の解剖
クロース綴函入製本頗美 菊判金一冊五百餘頁 正價金壹圓五拾錢 送料金十二錢

學生の友
文學博士 芳賀矢一先生著
クロース綴函入製本頗美
新形紙數八百餘頁
正價金壹圓
送料金十二錢

道德と品性
文學博士 遠藤隆吉先生著
クロース綴頗美本
紙數四六判四百餘頁
正價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

カード式讀史年表
文學博士 金澤庄三郎先生著
クロース表紙カード
石版著色印刷鮮明美麗
正價金十八拾錢
送料金二錢

忙中隨感
法學博士 水野錬太郎先生著
クロース綴函入頗美本
四六判四百餘頁
正價金壹圓貳拾錢
送料金二錢

人格と品位
法學博士 浮田和民先生著
クロース綴函入頗美本
四六判五百餘頁
正價金壹圓參拾錢
送料金十二錢

最新名著目錄

人間の價値
海老名禪正先生著
クロース綴函入製本頗美
四六判全一冊六百餘頁
正價金壹圓五拾錢
送料金十二錢

書齋より街頭に
田中王堂先生著
クロース綴函入體裁清新
菊判全一冊五百五十頁
正價金壹圓八拾錢
送料金十二錢

近代文藝の解剖
慶應大學教授 馬場孤蝶先生著
洋裝函入體裁優美
菊判全一冊五百頁
正價金壹圓五拾錢
送料金十二錢

德育と智力
法學博士 戸水寛人先生著
クロース綴函入頗美本
四六判全一冊四百頁
正價金九拾錢
送料金八錢

教育時言
法學博士 高田早苗先生著
クロース綴函入頗美本
四六判全一冊四百頁
正價金壹圓
送料金八錢

文學博士 大槻文彥先生著
復軒雜纂
菊判五百餘頁 クロース綴全一冊頗美本
正價金壹圓五拾錢 送料金十二錢

法學博士 横田國臣先生著
宇宙根本問題
四六判全一冊 クロース綴頗美本
正價金五拾錢 送料金八錢

文學士 久保天隨先生著
筆と四季
洋紙四六判全一冊 裝數二百餘頁
正價金四拾錢 送料金八錢

文學士 樋口龍峽先生著
想の泉
洋裝小形全一冊 紙數三百頗美本
正價金四拾錢 送料金八錢

酒井不二男先生著
植物の文學的研究
四六判八百餘頁 クロース綴函入頗美本
正價金壹圓八拾錢 送料金十二錢

最新名著目錄

渡邊約山先生著
禪學活要
クロース綴函入頗美本 紙數五百餘頁
正價金壹圓拾錢 送料金八錢

文學博士 加藤玄智先生訂
宗教心理講話
クロース綴菊判頗美本 紙數三百餘頁
正價金壹圓參拾錢 送料金十二錢

山鹿素行先生祕著
士道
クロース綴四六判頗美本 紙數二百三十餘頁
正價金七拾錢 送料金八錢

山鹿素行先生祕著
中朝事實
クロース綴四六判頗美本 紙數三百四十六頁
正價金八拾錢 送料金八錢

海軍教授 岩佐重一先生著
軍人精神の修養
クロース綴天金頗美本 紙數三百五十六頁
正價金壹圓貳拾錢 送料金十二錢

最新名著目錄

文・法學博士 加藤弘之先生著
新常識論
洋菊判 函入 頗美本 五百二十餘頁
送料 正價金壹圓八拾錢

法學博士 田中穗積先生著
靜思健鬪
洋菊判 函入 紙數五百餘頁 頗美本
送料 正價金壹圓八拾錢

文學博士 村上專精先生著
立志論
洋裝 四六判 函入 紙數四百餘頁 頗美本
送料 正價金壹圓四拾錢

法學博士 松崎藏之助先生著
世道と經濟
洋菊判 函入 三百五十餘頁 頗美本
送料 正價金壹圓貳拾錢

文學博士 吉田東伍先生著
日本文明史話
洋菊判 函入 四百五十餘頁 頗美本
送料 正價金壹圓五拾錢

最新名著目錄

法學博士 神戸正雄先生著
社會主義及社會的運動
洋菊判 函入 全頗美本 一冊
送料 正價金壹圓貳拾錢

法學博士 大塲茂馬先生著
人權伸張論
洋菊判 函入 全頗美本 一冊
送料 正價金壹圓貳拾錢

法學博士 花井卓藏先生著
人生と犯罪
洋菊判 函入 全頗美本 一冊
送料 正價金壹圓貳拾錢

法學博士 粟津清亮先生著
處世と人生
洋裝 函入 頗美本 二十頁
送料 正價金壹圓貳拾錢

法學博士 中村進午先生著
蛙のはらわた
洋裝 函入 全頗美本 一冊
送料 正價金八拾錢

最新著名目錄

現代と道德
文學士 吉田靜致先生著
クロース綴函入頗美本
四六判全一冊六百餘頁
正價金壹圓五拾錢
送料金十二錢

實行論
黑岩周六先生著
クロース綴函入頗美本
四六判三百五十餘頁
正價金九拾錢
送料金八錢

自修論
早大教授 安部磯雄先生著
クロース綴函入頗美本
菊判全一冊五百餘頁
正價金壹圓八拾錢
送料金十二錢

外人の觀たる日本
伯爵 大隈重信閣下序文
洋裝函入頗美製本
菊判全一冊三百餘頁
正價金壹圓參拾錢
送料金十二錢

我半生の筆
文學士 大町桂月先生著
クロース綴函入體裁優美
四六判全一冊五百餘頁
正價金壹圓
送料金十二錢

最新著名目錄

近代生活の解剖
岩野泡鳴先生著
洋裝函入頗美本
菊判全一冊五百餘頁
正價金壹圓五拾錢
送料金十二錢

哲人主義
田中王堂先生著
洋裝函入頗美本
菊判全二冊各三百餘頁
正價金貳圓五拾錢
送料金十二錢

奮鬪成功錄
岩崎錦城先生著
洋裝四六判頗美本
紙數四百五拾餘頁
正價金九拾錢
送料金八錢

二宮尊德の新研究
田中王堂先生著
洋裝天金頗美本
四六判全一冊四百餘頁
正價金九拾錢
送料金八錢

作文百科辭林
大町桂月先生著
洋裝函入頗美本
四六判全一冊六百餘頁
正價金壹圓貳拾錢
送料金十二錢

最新名著目錄

翁問答
近江聖人 中江藤樹先生著
洋裝 全一冊 頗美本
菊判 クロース綴函入
定價金七拾錢
送料金八拾錢

佛典結集
文學博士 松本文三郎先生著
菊判 クロース綴函入 三百餘頁 頗美本
定價金壹圓貳拾錢
送料金十二錢

小乘佛教史論
舟橋水哉先生著
菊判 クロース綴函入 三百餘頁 頗美本
定價金壹圓貳拾錢
送料金十二錢

山上の說教
海老名彈正先生著
菊判 クロース綴函入 三百餘頁 頗美本
定價金壹圓貳拾錢
送料金十二錢

西行法師
梅澤精一先生著
菊判 クロース綴函入 三百六十餘頁 頗美本
定價金壹圓貳拾錢
送料金十二錢

325
370

終